四十、為治魔地蔵

江戸時代に書かれた古文書に『表糟屋郡尾仲邑庄ノ郷為治魔地蔵縁起』というものがあります。それによると、天正年間（一五七三～九二）、尾仲村の庄に住んでいた毛利四郎左衛門が、西林寺参道横の竹林に埋もれていた石を拾って持ち帰り、お地蔵様とは知らずに竈の石にしてしまったそうです。

毎日毎日煮炊きをするたびに火で焼かれて、このお地蔵様はいじめにいじめられました。

お地蔵様をそうむげ（粗末に）に扱って良い事があるはずはありません。この家には次々と災難がふりかかり、住んでいた毛利家の人々はことごとくみな死に絶えたそうです。また、その屋敷も原因不明の出火で全焼してしまいした。

以来、人々はその屋敷跡に近づこうとはしませんでした。

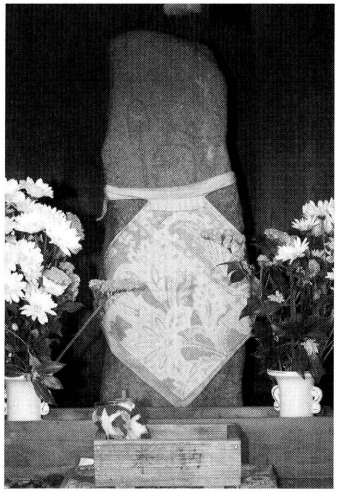
それから数十年たったある日のこと、毛利屋敷跡に火の玉が出るとか稲妻のような怪光が走るとかの噂がながれていたので、村の有志数人が集まりその場所を探検することになりました。

探検当夜、彼等は恐る恐る毛利屋敷跡に近づくと、何やら鈍くて青い光が古い竈跡のような場所から見えてきました。みな身を寄せ合ってそろりそろり近づいてみると、そこにはおよそ三尺ほどの自然石が半分土に埋もれていました。よく見ると黒くすすけた細長い石の表面にはお地蔵様が浮き彫りにされているではありませんか。

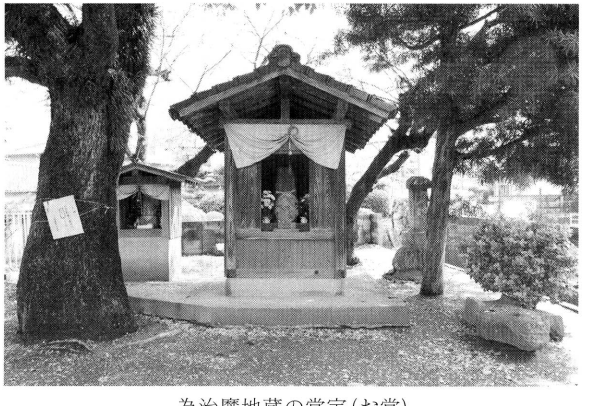
「このようなところに居られてはもったいない」と村人達は、村の鬼門にあたる谷部に堂宇を建て、村の守護神にしたそうです。

このお地蔵様はその昔、尾仲村にあった七寺《西林寺、見性寺、萬城寺、正元寺、西方寺、龍蔵寺、常楽寺》のうちの一つのお寺に祀られていたものが、そのお寺が廃寺となり、打ち捨てられたものを偶然に毛利氏が拾い、竈の石にと運び利用したものであろうと伝えられています。

そこで、後世このいじめられていたお地蔵様のことを為治魔地蔵と呼ぶようになったといわれています。今でも、毎年七月二十三日にお堂の前でお祭があります。



為治魔地蔵



為治魔地蔵の堂宇（お堂）